

平成28(2016)年

10月1日

第185号 毎月発行

編集 公民館だより編集室
発行 西東京市公民館

毎月第4月曜日は休館日です

西東京市

公民館だより

今月号の内容

2面…自分のトリセツ研究講座、高齢者の課題を考える講座、まちづくり講座②、ライフスタイル講座 ほか
3面…子ども向け多文化共生講座、ちいさな展示会 ほか

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

▼2002年の第2回西東京市民映画祭の時に、自主コンペをしようと思ったのはなぜですか。自主制作映画には商業映画にない親近感があります。また、西東京シネマ倶楽部として商業映画を楽しむのでもいいけれど、これから映画映像業界に進もうという若い映画作家の発表の場を作り、応援しようという思いからです。



2015年自主コンペ本選会・表彰式後の記念撮影



全国から寄せられた応募作品

自主コンペでは、上映時間20分以内の短編映画を公募し、全国から寄せられた100を超える作品の中から受賞作品を選びます。15年の歩みの中で実績を重ね、高い評価を受けています。過去に最優秀作品賞を受賞した監督の中には、その後、映画制作会社と契約して活躍している人もいますね。

▼継続しようと思ったのはなぜですか。一年目は西東京市誕生一周年記念事業として市の主催で行われましたが、翌年からは関係機関の協力を得ながら、市民の力で運営されています。第7回から受賞作品のレベルが高くなりました。落合賢監督(太秦ライムライト)ほか、佐藤福太郎(現福山功起)監督(鉄の子)ほか、金井純一監督(ゆるせない、逢いたい)ほか)など、プロになる方も現れ、自分たちがやっていることは間違っていない、という自信につながりました。

▼審査は予選会と本選会で行われます。まず、西東京シネマ倶楽部の運営正会員が全応募作品を審査して本選に進む12、13作品を選びます。保谷こもれびホールでの本選会では、映画監督や映画評論家らが最終審査を行います。予選会では、どこに着目して審査するのですか。始めは、悩みながら審査しました。佐藤純彌監督に教えられたのは、「映画は映像で語るもの。起承転結を見る。スケッチや小説ではなく、テーマが表現されていて、社会性があれば、人に見てもらえる」ということ。監督には映画を見る目を育てていただきました。

映画を通してボランティア

西東京シネマ倶楽部と自主制作映画コンペティション

毎年11月に西東京市民映画祭の一環として開催される「自主制作映画コンペティション(競技会)」(以下「自主コンペ」)は、今年で15回目を迎えます。実行委員会の中核を担う西東京シネマ倶楽部の山本恵司さん(代表)と長津文江さん(実行委員長)にお話を伺いました。

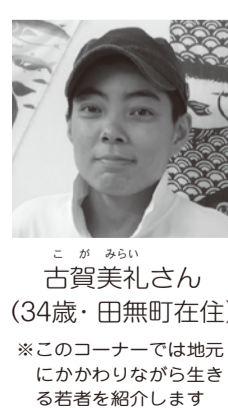
西東京市民映画祭2016
第15回自主制作映画コンペティション・本選会
日時 11月19日(土)
13時～ 上映・審査
18時～ 表彰式
場所 保谷こもれびホール

西東京シネマ倶楽部は、定期的に「市民名画座」(映画会)を行うほか、公民館や市の事業に協力するなど、地域に根ざした活動を続けています。▼活動を振り返って、どのようなことを感じていますか。映画が好きの人が集まり、映画を通して懇親を深める。そして、映画でボランティアをする。それが西東京シネマ倶楽部です。自分たちが選んだ作品を上映して、人に感動してもらおうから。活動が続けてこられたので、自主コンペも会も順調に年を重ねてきたと思います。同時に、まちの高齢化を感じます。だからこそ、続けなければ。5年ほど前から市民名画座に足を運ぶ人が少し減りました。高齢になると外出自体が難しくなりますが、外国映画の字幕を追うのも大変なので、今日本映画を中心に上映しています。車いすを使用する方も来られます。

今春、柳沢2丁目団地のそばに、魚屋さんが新規開店しました。店主ひとり、週に二日半の営業という小さな店です。店主の古賀さんが魚に目覚めたのは、魚をさばく様子を見て「面白い」と感じた中学生のとき。さらに、十代で始めたスーパーのアルバイトでたまたま鮮魚コーナー担当になり、今は、こうしたアルバイトも続けながら、自分のお店を開いています。お店では、その日に「おいしそうだ」と感じた魚を仕入れ、買いやすい価格で提供しています。刺身にしたりあとの骨を乾かして骨せんべいの材料として売ったり、人差し指程度の大きさの魚を大量に開いたりもします。ご飯の入った丼を持参し、海鮮丼にしてみたら帰るお客さんもいます。

店内は、魚をさばく手元を見られるようになっていきます。特に子どもが来店した場合には、ていねいに説明しながらさばいていきます。どれもこれも、魚のおいしさを伝えたい気持ちからです。それなのに「あと10年後? 魚屋やってないかもしれないですよ。いろんなことやってみたいんで。業界的にも厳しいですし……」と、ひょうひょうと言う古賀さん。実際、市内の個人鮮魚商は10店もないのが現状です。「鮮魚ケースのリース期間があと5年なんで、その間は、ここで魚売らなくちゃと思ってますけどね」とのことなので、小さな魚屋さんの軽妙トーク(実は社会派)と、おいしいお魚に出会いたい方はお早め。

西東京なう
魚屋一筋でもないですよ



こが みらい
古賀美礼さん
(34歳・田無町在住)
※このコーナーでは地元にかかわりながら生きる若者を紹介します

写真で見る いまむかし

東京大学原子核研究所(核研)

東京大学原子核研究所の建設が決まると、田無町(当時)では設立反対の声が上がりましたが、話し合い等を経て、昭和30(1955)年に設立されました。平成9(1997)年、3つの研究所の統合による高エネルギー加速器研究機構(KEK)の発足後は、KEK田無分室になり、平成13年、つくば市へ移転しました。

東京大学原子核研究所(昭和41年ごろ)
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵

現在は、西東京いこいの森公園
原子核研究所址碑が建立されています
撮影:水口トミオ(保谷町在住)